

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』(第五十三～五十九章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Mauperin (chapitres LIII–LIX) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.67 (2018. 10) ,p.115(14)- 128(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20181031-0128

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モプラン』

(第五十三～五十九章) (翻訳)

山 本 武 男

これまでのあらすじ

今住んでいるパリ近郊のラ・ブリイシュから生まれ故郷のフランス北東部のモリモンに移れば、病は癒えるのではないか。そんなルネの願いを聞き入れて、父親は愛娘を、汽車と馬車を乗り継いで希望の地へと移転させる。ルネは幼少の幸せな日々を思い出し、一時、潑刺とした様子を見せるが、父親への愛の「告白」を境に、再び衰弱し始める。溺愛してくれた実父への近親相姦的な愛情故に適齢期にあつて縁談を拒否し続けてきたルネは、育った家や父親を絶対的な基準とする彼女とは対照的な性格で野心家の兄が、出世の為に富豪の妻と不倫したり、貴族名を不当に名乗ったことに眉を顰め、後者の一件に不用意に干渉した結果、決闘沙汰を惹き起こし、兄は命を落とす。この思いもよらない展開の衝撃が、彼女の持病の心疾患に大きな影響を齎した。父親は、医者の見解を聞いて愕然とする中で、一縷の希望を探しあぐねるのだった。

〔翻訳〕

五十三

時によつてはまた、自らが生存し続けていることを嘆き、死の冷やかさも感じられるあの病人特有の言葉がルネの口から漏れた。

或る日、父が新聞を読んで聞かせると、娘は結婚欄を読むと言つて父の手からそれを取り上げ、少しすると、「二十九歳……年寄りねえ、この人！」と自分自身に話しかけるように言つた。が、彼女が読んでいたのは、実際は死亡欄なのだった。

モブラン氏は返事をせず、部屋を一周してから出て行つた。

一人になったルネは、父が確り締めて行かなかつた所為でばたばた音を立てているドアを締める為に起き上がった。彼女は廊下の方に呻き声を聞いたように思つたので、見てみたが何もなく、耳を澄ますと沈黙が返つてきた、が、ドアを閉めようとすると、また同じ物音が聞こえたように思われた。廊下に進み出て、父の部屋へと向つたが、果たしてそこが例の物音の出場所であつた。鍵が挿さつていなかったの、ルネは身をかがめると鍵穴から父が寝台の上に身を投げ出し、嗚咽しすすり泣きで身を震わせ、絶望と涙とを押し殺す為に、それらを枕の上に押し付けている父の姿を認めたのだった。

五十四

ルネはもはや父を泣かせたいとは思わなかった。

翌日、彼女は父に向って言った。

「ねえ聞いて、パパ。ここ、離れない？ 九月の終わりに、それで決まりよ。色々な所に行ってみたい……一月ある場所で過ごしたら、二週間は何処か別の場所でといった具合に……あたしたちの思いのままに。それから、パパが戦闘に参加した全ての戦場に連れて行ってもらいたい……ねえ、パパ、人が言っていたことだけれど、パパは戦争に行った先でその王妃に恋をしたって話じゃない……もし、彼女にあたしたちみんなで会いに行ったら、素敵よね？ ところであの事は既にそのとき起っていたのでしょ？ 何処でしたかしら、ボルドノーヌでしたわよね？ パパが剣であの深傷を負ったのは」

そう言つて父親の頭を両の手の間に挟むと、ルネは勝利の女神の指が記した、窪んで白くなった部分に唇を押し当てた。

「あたしに、先ずはぜんぶ説明して欲しいわ」彼女は続けた。「娘に聞かせながら遠征を再現するなんて素敵でしょ……もし話しきれない様なら、ひと冬、ね！ 二人で話して過ごしましょう……で、あたしがまた前みたいにちゃんと馬に乗れるようになる頃には、確かにあたしたち、姉さんとあたしを併せれば結構なお金持ちなんだから……パパは十分苦勞なさったし……製糖所を売り払って、皆でここへ来ることにすればいい。でも二ヶ月間はバリで楽しませようね、それで十分でしょ？ パパはお仕事が好きだから、テートヴユイドの農地を姉さんのご主人から取り戻せばいい……雌牛を飼って……ママンの為には綺麗な家禽飼育場を設けて……聞いている？

ママン……あたしは一日中、屋外で風に当たっていたい……見ていて！ あたし、本当に驚くほど丈夫な体になってみせるから……そして、何時も沢山のお客さんをお迎えするの……田舎でだったら、それが出来るでしょ？ ……それくらいなら破産したりはしないわ……それであたしたち、この上なく仕合せになるのよ、さあ……」

旅、計画、彼女の口の端に上るのはもはや未来の事柄だけであった。それらが、約束されたこと、しかも手で触れて確かめられることでもあるかのように話したのである。家中の期待が彼女に掛かっているのが分るだけに、彼女は自身に迫りくる死の影をひた隠しにし、非常にはつきりと生きる意欲を示したので、モブラン氏は娘が夢を語る様を見聞きするにつけ、彼自身彼女とともに、来るべき年月、平和と落ち着き、更に幸福へと行き着く年月を夢想するに任せたのだった。ルネの方は時に、病人の自分が周囲に醸し出した幻影に一瞬自身で酔いしれ、自分の嘘に捕えられて、僅かの間だけが我を忘れて現実を見誤り、小さな声で「もし、でも本当に助かったらどうしよう！」と独り言を言いさえもした。

別の時には、彼女は穏やかに過去を振り返った。それは物語にして、打ち明け話であり、愉快的追憶にして、少女時代の喜びを喚起する言葉であった。それは、最後に一度、持てる全ての若さをかけて、父親を抱き締める為に奮起したとも取れる姿だった。娘は父に言った。「そういえば！ あたしの舞踏会用の初めてのドレスのころ……！……思い出すわ……薔薇色のチュールで出来ていて……デザイナーの女の人が来てくださらなくて……雨が降っていて……馬車が無かったから……パパが駆けてつてくださったのよね！……ボール箱を抱えて帰ってきたときのパパの姿ったらなかったわ！……きつく抱きつくものだから、あたしまでびしょ濡れになった、懐かしいわ……」

父親を支え、自分自身をも支える為には、ルネは一人、自身の勇気を頼りにするしかなかった。母親も確かにそこで、娘の傍にいたが、アングリの死以降は、無感情になり、むっつりしていた。無関心で黙りこくっている様

子は、心ここにあらずといった態であった。昼も夜も、一言の文句も言わず娘の傍で過ごし、我慢強く、常に気分にもたなく、何事につけ心の準備が出来ており、まるで召使のように従順で謙虚でもあったのだが、しかし彼女の親切さの中には何かしら機械的なものがあつた。彼女の愛撫からは魂が抜けてしまつており、その優しさは体には触れえても心にまで達することは無かつたので、娘は母をその手以外に感じる事が出来なかつた。

五十五

ルネはまた父と一緒に、身を引き摺る様にして小さな森の入口付近の木々の所まで行つた。その森の境でふと立ち止まり、一本の樫の木に身を寄せると彼女は滑つて苔の上に背中をついた。隣には田園地帯が開けていて、干草の匂いや、日を浴びた草や蜂蜜の香りが彼女のところまで漂つてきた。森の空気も流れてきたが、そこには泉の冷やかさや窪んだ小道の湿気が感じられた。深い沈黙から広大で鈍いざわめきが立ちのぼつていたが、それは蜂の巢の絶えざる騒音とも海の無限の囁きとも取れる音で耳を満たす舞い立つ様な唸りであつた。ルネの周囲にも、すぐ近くにも、広々として且つ生き生きとした平和とでも呼ぶべき空気があり、そこでは空中の羽虫も、枝の葉も、樹皮の影も、空に聳える木々の梢も、小道沿いのからす麦も、皆すべてが揺れ動いていた。またその唸りからは呼吸のような物悲しい調べが出ていたが、それはそよ風であり、遠くから馳せ来て、通過するとき木々を震わせるのだが、すると細かく揺れる葉の上の青空はより動かざるもののように見えてくるのだつた。枝はゆつくりと下がつたり上つたりし、風のそよぎはルネのこめかみを通り、首に触れ、微風が彼女を包み、運び去ろうとする。肉体の意識や、生きている事から来る感覚や疲れが少しずつ薄れゆくのに任せていると、心地よい衰弱が彼女を包み、自身の存在から半ば離脱し、何時でも万物の神々しい安らぎの中に四散する準備が出来て

いるかのように思われてきた。時折、彼女は父の方に身を寄せたが、それは恰も一陣の風に攫さらわれるのを恐れる子供の様であった。

庭には苔むした石のベンチがあった。夕食後の七時ごろ、ルネは好んでそこに腰掛け、ちよつと頭をのけ反らして体を伸ばし、丸葉朝顔の巻きひげに耳をくすぐられながら、虚空を眺め続けるのを好んだ。艶のある薄明かりの中に万物が沈みゆくあの美しい夏の日々であった。知らず識らずのうちに彼女の視界も考えも、消えかっている空の白さのなかに溶け行ってしまうそうに感じられた。見詰めれば見詰めるほど、この弱まりゆく日の光のなかで昼間の残光が見出され、眩暈とともに安らぎを感じた。深い闇が少しずつ広がってくると、夜風のそよぐ向うで、教会用の大蠟燭の火のような青白く数知れない星々の光が既に瞬いているらしく見えた。そして時々、沈む寸前の斜陽のごく僅かな光に目を眩くらませられたりしつつ、常に遠ざかりゆく明るさを見詰めることに疲れてくると、既に身を擡もたげて高い所へ奪い去って行こうとしているかのような深淵を前にして、彼女は僅かのあいだ目を瞑るのだった。

五十六

「お母さま」彼女が言った。「あたしがどれほど綺麗になれるかお分かりにならないでしょ？ だから見て……ママンのお好みに合わせて爽やかな装いに見てみたの……」

両の手を頭のてっぺんでゆったりと王冠のような形で組んだまま、彼女は枕が欲しくなるに任せて長椅子の方へ赴くとそこでちょこんと身を横たえたが、胴の動きもしなやかにしゃれた、しかし苦しそうでもある優美さを以て体を投げ出したのだった。

寝台が、そこで敷布にくるまっていることが、彼女には如何にも病人臭く感じられた。そこにいつ続けたくないと思った彼女は、寝台から離れる為に最後の力を振り絞ったのだった。十一時ごろに、ゆっくりと時間を掛けて、しかも勇壮に、時に動作を止めて息をついたりしながら服を着たが、頭髮を梳るときにも持ち上げた腕が疲れ易いので休み休み行っていた。英国製のレースの付いたピンを髪に刺し、白いピケの糊がきいていて布地が厚く、大きな皺の寄った部屋着を引つ掛けた。小さな足をサンダルに入れると、その上にリボンの花結びを付ける代わりに、毎朝クレティエノが持つて来てくれる本物の蓐を二つの束に分けてその各々で飾った。そして、起き上がって服を着た病人たちが保持するあの生気を損なうまいと、彼女は夜まで純白で香りの良い装いに身を包んで横たわっていた。

「ああ！ 病気になるのって、何て奇妙な事なんでしょう！」そう言いながら彼女は自身の姿や周囲の部屋の様子に目を配った。あたし、美しいものだけしか好きになれなくなってしまったの、想像してみても……それだけがあたしの今の喜びなのよ！……もうみつともない恰好なんてできない……分かるでしょ！ 欲求が収まらないの……よくご存知でしょ、あの小さな水差しのこと……銀の象嵌があつて、とても値の張る……テアトル・フランセへ行つたとき、幕間に抜け出してサン・トノレ街のあの宝石店で見たあれ……もしまだ売れていなくて置いてあつたら……ぜひあたしにあれを届けさせてよ……参ったわ！ 趣味がひどくお金のかかるものになってきたのを感じているの、前以てお知らせしておくわね……いながらにして全ての欲求を満たしたいと思えて来るのよ……あらあら！ 性格が難しくなってきたわ……何かにつけて。優雅さに就いてあれこれ考させられるわ……以前はまったくしゃれつ気がなかったのに……それが今では自分と、周囲の全てのものに目を配っている、よく見るようになった！……今では、色によっては見るのが辛いものもあるわ、信じられるかしら？ そうかと思つとこれまで注意したことのない色が目に付いたりもして……こういう風になるのは、もちろん病気の所為な

のだけれど、病気になるって本当に厭わしいことね！　それで美しいものは何でも、前より一層好きにならずにはいられなくなるのよ……」

死が齎すこれらのしゃれ気、これらの気紛れ、これらの洗練と優雅の趣味の他に、別の感覚もルネの中に芽生えた。彼女はより女性的になり、またそうなったことを自身自覚した。病気による憔悴を通して気力が衰えると、情愛が深い反面、少々男性的で荒っぽいところのあった彼女の感受性は丸みを帯び、寛ぎ、和らいだ。徐々に外観にも、趣味にも、気質にも、考え方にも、女らしさが幼少の時分以来ふたたび漲るようになった。精神も変容を遂げたが、それはこれまでに使い切られずに残っている部分の様であった。彼女ははっきりと判断するのを止め、とげとげしい言葉も吐かなくなった。時折、僅かに嘗ての表現が口について出るくらいで、そんなときには、「あのルネも今は年をとったわ、せいぜいこの程度だもの！……」と言った。以前自分が喋った事やその際の大胆な態度や調子、若者たちとの親密な交わりなどを思い出すにつけても、彼女はそれらを敢えてする勇氣はもはや無いと思われてくるのだった。そんな過去の自分に驚きを覚え、今となってはそれが同じ自分の仕業であることも認め難かった。彼女は真面目な、もしくは滑稽な書物を読むのを止め、夢見心地にさせてくれる穏やかな内容の本だけを愛するようになった。

父親は、以前、娘を連れて行った騎馬獵に就いて語り、また何時か一緒に行けるだろうと話したとき、彼女は乗馬するという考えに恐怖してしまつたが、それは誰かが落馬する情景を髣髴したからであつた。田園で味つた魂の動揺や衰弱は、彼女にとってはまったく始めての経験であつた。花などにはこれまで決して心奪われることがなかったのに、それが今は人のように愛おしい存在になっている。針仕事が嫌いで仕方がなかったのに、ペチコートのような刺繍に好んで取り組むようになった。少女時代の思い出に触れて、嘗ての自分に目覚め、そのころに立ち戻ったかのようにだった。彼女の記憶は、少年少女たちとの交友に行き当たり、女友達やその子らと一

緒に行つた場所、初聖体のとき同じ列に坐っていた幾つかの顔が蘇った。

五十七

窓から眺めているとき、彼女は一度、埃っぽい村の道の真ん中の岩石と轍わだちの間にしゃがんで自分の幼な子のおしめを脱がせている婦人を見たことがあった。腹ばいにされた子は、その上半身は影の中にあつたが、日に照らされた小さな足を揺り動かし、足首から先を交差させたかと思うとばたつかせ、陽光は、その子の剥き出しの肌を鞭うつ様に、が優しく注いでいた。子供を愛撫し、また擦くすくつているかの様な日の光は、その子の踵かかとを、我が主キリストの聖体の大祝日の籠の薔薇のような色に輝かせていた……

母と子は去つたが、ルネはまだその場所を眺め続けていた。

五十八

「分かるでしょ」彼女は父に向つて言った。「あたしは誰も愛する事は出来なかつたのよ、パパのせいで愛情の問題については酷く難しい人間になつてしまつたんだわ。前以てあたし、誰もパパほどあたしを愛せる人はいないって確信してしまつたのよ！ あたしがいるとき、パパの表情がとても豊かになるのが分かつたわ、とても嬉しそうだった！ それに一緒にどこかへ行けば、あたしのことが、パパは、とても誇らしげだった！ 胸を張つてあたしに腕を貸してくれていたわ。だからパパ、あたし、どんなに愛されても、パパほど愛してくれる人は見つけることが出来なかつたのよ、パパはあたしを可愛がり過ぎたんだわ……」

「そんな事なんでもない、そのうち、おまえが元気になったら立派な青年に出会うよ……」

「あら！ パパの言う立派な青年は近くにはいないわ！」ルネは目で微笑みながら言った。そして続けた。「あたしが真剣に結婚しようと望まなかったことは、パパの目には奇妙に映っているんじゃない？ そうでしょ！ じゃ、言うわ、それはパパのせいなのよ。だから！ あたし、後悔なんかしてない……望むことなんかあったかしら？ だってあたしは満足していたのだから。別の形の幸福なんて、思い浮かばなかったし、考えようともしなかったし、変化も望まなかった、あたしはとつても仕合せだったから！ ね、パパ、今少し質問しても良いかしら？ 人生は、パパの傍でとても穏やかに過ぎて行く……そして心はとても喜びに満ちていたわ！」少しの沈黙があつて、また彼女は続けた。「きつとそうよ、もしあたしが多く娘たちの様に素っ気ない親に育てられ、父親もパパみたいな人じゃなかったなら、そうよ、それなら多分、あたし、他の人と同じ様にしていたと思うわ……愛されることを望んで、結婚というものに人並みの夢を抱いたでしょう……ここまで言った以上、全て言うてしまふべきよね、あたし、人を恋するつてことが、何時も何だか苦手だった。からつきし駄目だった訳じゃないけれど……でも誰が相手のときでも、ちよつと笑いが込み上げてきてしまつて……覚えてゐるかしら？ 姉さんが結婚するとき、夫になるダヴァランドが姉さんに媚を売つていたでしょ。あたし、さんざんあの家の人たちをからかつてやつたわ。

「性悪女」、彼らは終いには、あたしのことをこんな風に呼ぶようになった……でもね！ あたしもみんなと似た様なことを全く考えないではいられなかったんだわ、いちいち話さないけれど……ぼんやりと、夢のような思いに耽つて過ごした日々もあったの。それすらなかったら、女じゃないわよね……だけれども、そういうのは、まったくもつて、僅かな興奮を与えてくれる思考の音楽みたいなものだったわ……理想の人は想像の世界を行ったり来たりしていたけれど……でも、誰かしら、現実の男の人の顔と重なる事は決してなかった……決して。だ

から自分の部屋から出たら、その夢も終り……誰かを見かけるなり、現実を見るあたしの目だけが生き生きしてきてしまつて……そうなるにあざける為に人を見ることに専念してしまうのよ……どれほどパパの性悪な娘が厳しい目をもっているか、ご存知でしょ！……でも、そうせずにはいられなかったんだわ……」

「旦那」クレティエーノが半ばドアを開けて言った。「マギユさんが下に来ていらして、お嬢さまは人を迎えられる状態かどうか訊ねていらつしやいますが」

「ああ！ お父さま」と祈るような調子でルネが言った。「今日はお医者さまには会いたくないの……調子、良くないし……いや大丈夫だけれど……だって彼、やたらと鼻を吸^するのだから！ パパ、何であの人、あんなに鼻を吸^するの？」

モブラン氏は笑いが零れるのを禁じ得なかった。

「教えてあげよう……往診の為に冬でも彼は小さな二輪馬車で駆けつけてくるからだよ……片方の手は手綱で、もう片方の手は鞭で塞がっているだろ、両手が使えないから鼻をかむ習慣がなくなってしまったのさ……」

五十九

「空は青く晴れ渡っているかしら？ お父さま。見てみて」ある日の午後、彼女は自分の長椅子から父親に向つてそう訊ねた。

「ああ、そうだねえ」モブラン氏は窓辺から振り返つて答えた。「快晴だ」

「まさか！」

「なぜだね！ 苦しくなってきたのかい？」

「いいえ……ただ雲があるように感じるの、やがて天気が変わるといふ気がする……病気になるとても変わったことがあるものね、空が元気な人たちよりも、もっと近くに感じられるのよ……あらまあ！ あたしは今やとんでもない晴雨計になってしまったみたいね……」

そう言うと、話をする為に自分の体の上のいったん置いておいた本を取り上げて読み出した。

「あまり本を読むと体に毒だよ、いい子だから。じゃ、少しお話をしよう……本をお渡し……」そう言ってモブラン氏は手を伸ばし、彼女が指先から滑り落とそうとする書物を自分の指先に捕えた。本を開けてみるとモブラン氏は、二三年前に娘の目に触れないようにと折っておいた数ページを認めたが、その折り目は、読んではいけない箇所だと伝えたときの儘であった。

ルネはうとうととしてきた様であった。雷雨の気配はまだ空には見られなかったが、彼女には重くのしかかり始めていたのである。押し潰すかのような耐え難い重みと同時に、自身の存在全体に広がったある種の神経的不安にルネは苦しみ出した。彼女には、空気中に漂う電気が体に入り込んで作用するかの様に感じられた。深い沈黙が突如、地平線の彼方から追い払われてきたかの様に訪れ、息を殺した感じの微風が田園の上を掠めながら過ぎて、彼女を強い不安に陥れた。時計を見詰め、喋るのをやめ、両の手を落ち着きなく絶えず動かし位置を変えていた。

「ああ！ 確かに、本当だ」モブラン氏が言った。「雲がある、それも大きな雲だ、フレノワの上空だ……来るぞ！ 来るぞ！……おや！ 広がってきた……ほら、我々の方へ、来る……窓も、雨戸も、すべて閉めたほうがいいかな……それでは灯りを点けよう……そうすれば私の大きな幼な子も、少しは怖くなくなるだろうから……」

「いや」とルネは激しく答えた。「灯りを点けないで……昼間なんだし……いやよ、やめて……それに」と彼女

は語を継いだ。「もう怖くなんかないわ……今は」

「まあそうだな！ 雲はまだ遠い」モブラン氏は話を合わせたが、それは彼女の返事を聞きつつ、この部屋の中にある数本の、死を思い出させる教会用の大蠟燭を目にしたからでもあった！

「あ！ ほら、雨」ほっとしたような声でルネが言った。「この雨、露みたいよ……飲める筈よ、そうでしょ？ ……ここへ来てちょうだい、あたしのすぐ傍へ……」

先ずは大粒の雨が一滴一滴と降り出し、それから雨は、甕をひっくり返したかのように空一面に広がった。雷雨はモリモン全域を覆った。雷鳴がごろごろと鳴り、破裂する音を立てた。田園は光に照らされ、そして闇に落ちた。薄暗い部屋の中は絶えず、青白い閃光が走り、一発で部屋中が明るくなり、瞼を閉じて横たわったまま動かない病人の頭から爪先までの全身を光の経帷子で覆った。

とても強く最後の雷が鳴り、それは非常に近くで炸裂したので、ルネは父親の首に両腕を回し、その胸元に頭を隠した。

「馬鹿だなあ、終わったよ」とモブラン氏は言った。

彼女は翼の下からちよっと顔を出す鳥の様に目を父親の方に向け、抱き着いたまま、「ああ！ あたしたち、二人で死んでしまったかと思った！」と言いながら後悔の様なものを含んだ微笑を浮かべた。

(つづく)

当翻訳は以下に拠った。Edmond et Jules de Goncourt, *Renée Mauperin*, éd. Nadine Satiat, Flammarion, coll. GF, 1990, p. 240-249.